

読み書き対応 Tsukuba モデルの取組について

～発達性ディスレクシアの早期発見早期対応システムと専門的教員の育成～

茨城県つくば市教育委員会

はじめに

2013年以降つくば市は、障害種の中で最も出現頻度が高いと言われる発達性ディスレクシアを対象とし、文部科学省の委託研究事業<注1>を基に30時間に及ぶ専門的教員の養成(合格者は約20%)と、就学時健康診断を活用した早期発見早期対応事業の取組を、モデル校を中心に実践し、確かな成果を認めることができました。その成果に基づき、2020年度から全市規模でTsukubaモデルの取組を始めています。

<注1>2013年からの3年間は、当時筑波大学人間系の宇野彰教授が文部科学省の「発達障害に関する教職員育成プログラム関連事業」において、委託研究事業の一環として、教員向けに発達性ディスレクシアの概論・検査法・指導法などの研修を実施。筑波大学に近い茨城県南部の小中学校を対象とし、つくば市からは全日程出席可能な教員が各学園から1名ずつ参加。この時30時間の研修を経て検査や指導ができるまでの技術を身につけ、修了証を手にしたのは、最終的には5名。

2013年からの委託研究事業の2年目には、発達性ディスレクシアに関するリーフレットとVIDEO(家庭や学校で

の実態を理解してもらう【基礎編】と通常の学級での指導と支援の仕方がわかる【支援編】が作成され、これまで様々な場面で活用してきました。

VIDEOのダウンロードサイト

【基本編】

<http://dys-sch-2015.f5.si/>

ユーザ名:dyslexia

パスワード:d F a P V 7 r t

【支援編】

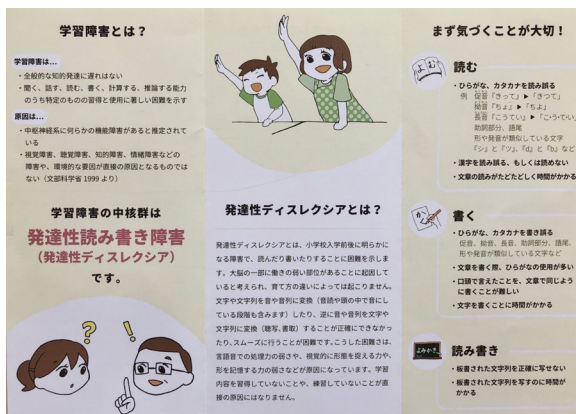
<http://dys-sch-2015-2.herokuapp.com/>

ユーザ名:dyslexia

パスワード:d F a P V 7 r t

上記研修において修了証を得た教員が中心となって2015年吾妻小学校での調査を行い、2016年文部科学省から承認された「発達障害の可能性のある児童生徒に対する早期・継続支援事業(発達障害早期支援研究事業)」へと繋がりました。更に、宇野元教授<注2>の研究は2017年～2018年の2年間、「発達障害に関する教職員等の理解啓発・専門性向上事業(発達障害の可能性のある児童生徒に対する教科指導法研究事業)」として継続され、桜学園(小学校3校、中学校1校)<注3>を中心に実践研究を行いました。併せて、希望により専門的な教員養成研修を受講した市内教職員の12名(教育局職員を含む)が修了証を得て、各学校での指導に生かせるようになりました。このような経緯から、宇野元教授の文部科学省委託事業の6年間の実績と桜学園の実践の成果を踏まえ、2020年度から「読み書き対応 Tsukuba モデル」として取り組むことになったのです。

<注2>宇野彰氏…医学博士、言語聴覚士、The Association of Reading and Writing in Asia 日本代表、NPO 法人 LD・



【リーフレット】

Dyslexia センター理事長、発達性ディスレクシア研究会理事長
<注3>つくば市は、2012年から小中一貫教育を完全実施しており、施設一体型の義務教育学校4校の他、小学校29校及び中学校12校は、各中学校区毎に小学校とともに学園を構成し、9年間の学びの連続性を目指している。

※以下、実際の取組内容をUDフォントで表記しています。

1. 桜学園の取組と成果

(1) 文部科学省委託事業(研究)の目的

○宇野元教授をはじめとする猪俣氏(2013.2016)小出氏(2020)等の研究により、年長児のひらがな読みの習得度に練習量は影響せず、子どもの能力そのものが反映されることが報告されており、その研究結果に基づいて年長時にひらがなの習得度を把握し、読み書きが困難なリスク児をスクリーニングし、就学後の読み書きの指導につなげる。

○通常の方法では練習効果が得られない児童に対し、専門的なトレーニングを受けた教員が対応することにより、読み書きを習得させる。

○上記の実践により、合理的な配慮を必要とする児童を減らす。

(2) 実際の取組

①目標：ひらがな102文字100%読んで書ける1年生

ひらがなの読み書きができると、ふりがながふってあれば教科書や本が読めるようになり、作文や日記が書けるようになって、将来ワープロでの入力や漢字変換ができるようになるので、大変重要です。

②年間スケジュール

【就学時健康診断】

- ・聴覚言語性理解力検査
- ・ひらがな10文字音読検査

【4月末】PTA学年懇談

- ・ひらがな読み書きの重要性の説明
- ・家庭学習説明

【7月初旬】ひらがな検査(標準読み書きスクリーニング

検査)①

- ・夏休み個別面談
- ・個々の学習到達度に対応した家庭学習説明

<夏休みの家庭学習>

【9月初旬】ひらがな検査 STRAW-R ②

- ・10月面談・通知
- ・個々の学習到達度に対応した家庭学習説明

<冬休みの家庭学習>

【1月初旬】カタカナ検査 STRAW-R ①

- ・2月通知・面談
- ・個々の学習到達度に対応した家庭学習説明

※4月から、教科の中で文字の読み書きが遅れないような授業展開を全体で行うとともに、7月のひらがな検査以降は、個別の対応が必要な児童に、読み書き指導の研修を受けた教員による指導を実施した。

この取組から以下の結果が確認されました。

③2016年～2019年の取組結果

○就学時に読み書き困難のリスクがあった24名については、担任と保護者の早期支援の結果、1年時の9月には21名が平均範囲内の成績を示すようになりました。また1年時の1月には専門の研修を受けた教員の指導により2名に改善が見られ、知的障害のある1名については、ひらがな清音が読めて書けるようになりました。

④2020年の取組結果

○30名のリスク児のうち、1年時の9月までに読み書き習得度が追いつかなかった児童は6名、1月時には1名となりました。

この1名については、個別の指導に対して保護者の同意が得られなかったため、授業全体の中で配慮する方法で指導を継続してきました。音読はクリアできたのですが、書字にはまだ困難さがあるため、今年度も引き続き学校全体で配慮した指導と保護者との話し合いを継続しています。

⑤桜学園の取組による成果

○早期にリスク児を発見できたことで介入時期を早めることができました。早期介入と専門的な指導により、かなりの児童が1年時の終わりには読み書きの能力が追いつくことが確認されました。

○研修を受ければ STRAW-R 検査(速読課題、漢字の読み、ひらがな・カタカナ・漢字の読み書き習得度等の検査が含まれる)が実施できます。この検査により、これま

で教師の勘に頼っていた判断を客観的に行うことができ、根拠に基づいた支援につながりました。

- STRAW-R 検査結果データを基に保護者に説明すると理解が得られやすく、スムーズに個別の対応と指導が可能になりました。特に低学年の児童に有効であり、自己肯定感を下げないことにも役立っています。
- 2018 年度から特別支援教育コーディネーター研修会で桜学園の取組を紹介してきたことにより、中学校が客観的評価に基づき読み書き障害への配慮を高校受験において申請し、高校の合理的配慮を受けて合格できたケースが 3 件ありました。

このような時に、どの程度の試験時間の延長が必要なのか、漢字の音読力や書字力の弱さを示しているのかについては、STRAW-R 検査でしか評価ができないので、この検査の実施ができる教員を増やすことが、指導や支援のために重要かつ必要なのではないかと考えています。

2. 「読み書き対応 Tsukuba モデル」について

桜学園の成果を踏まえ、つくば市全体の取組とした「読み書き対応 Tsukuba モデル」の内容は以下の 2 点です。

- (1) 発達性ディスレクシアの早期発見早期対応システムの構築…桜学園では就学时健康診断からスタートしたが、入学直後からの取組も含め各校の実情に応じて始める。入学後のシステムは桜学園の実践スケジュールに準じて行う。
- (2) 専門的教員の育成…市内 45 校（小学校・中学校・義務教育学校）の特別支援教育コーディネーターを対象に年間 8 回の研修会を実施する（全回出席が原則）。
 - ① 基礎編：発達性ディスレクシアの実態を正しく理解する。

「間違った理解がされがちであるが、発達性ディスレクシアは眼の問題ではないので、ビジョントレーニングで良くなることはない。二重に見えたり、文字が浮き上がって見えたり、動いて見えたりすることもない。」
 - ② 検査法の習得：具体的な読み書き習得度検査（STRAW-R、レーブン色彩マトリックス、文字習得に必要な音韻認識検査、視覚認知検査、語彙力・自動力検査等）について講義と演習をとおして学ぶ。
 - ③ 学校において、保護者の理解が得られた子どもたちに上記検査を実施する。

- ④③のデータを研修会に持ち寄り、データの読み方について学ぶ。
- ⑤効果的なトレーニング法に関して講義と演習をとおして学ぶ。
- ⑥学校において対象となる児童生徒に新たな指導法に基づいて指導する。
- ⑦⑥の結果を研修に結び付け、トレーニング法への疑問についてはトレーニング法に関する指導のスーパーバイズを受け、効果的な指導を実践できるようにする。

過去の中核的教員養成研修において修了証を得られたのは約 2 割であったことを踏まえ、検査は全員、指導に関しては各学園 1 名はできるようになることを目指しており、学園内での連携による早期発見と専門的な読み書き指導の実践に生かしていきたいと考えています。

3. 2020 年度の取組

2020 年度は、「読み書き対応 Tsukuba モデル」の本格実施となる予定でしたが、コロナウィルス感染防止の観点から内容を見直すことが必要になりました。

「読み書き対応 Tsukuba モデル」の取組 (2) については、演習の内容が多く、オンラインによる研修に振り替えることができないため、8 回全てを実施することは困難であると早期に判断しました。

しかしながら、「読み書き対応 Tsukuba モデル」の実践は確実に進めたいことから、次年度に向けて次のように変更して実施しました。

- 「読み書き対応 Tsukuba モデル」の取組 (2) の一部（基礎編）を 45 校の特別支援教育コーディネーター対象に実施
- 三密を避け、校長、教務主任（又は教頭）を対象に学園ごと（8～14 人）の研修会を実施
- ※全ての会場に宇野元教授の協力を得て、発達性ディスレクシアの正しい理解・具体的支援の説明及び桜学園の研究成果を紹介

コロナウィルス対応により計画を変更した学園研修の成果は、すぐに管理職等の意識の変化として表れました。研修

会で紹介された VIDEO を活用した全職員での校内研修が複数の学校で実施され、その結果、多くの教員の理解を得ることに繋がりました。

4. 2021年度の取組

(1)桜学園の取組

つくば市全体の取組のモデルとなった桜学園では、教職員の異動を踏まえた対応として年度当初に学園研修会を実施した。桜中学校を会場に桜中全職員の他、学園内3校の小学校からも各2名が参加し、Tsukuba モデルの内容及びモデル校としての桜中の役割、特別支援教育コーディネーターを中心とした年度当初からのスケジュールやスクリーニングの進め方等の確認が行われた。

この研修会が学園主催で4月5日に設定されていることに、桜学園の先生方の熱意と意気込みを伺うことができます。

つくば市全体のモデルとなる桜学園はこれまで通りのスケジュールに沿った取組を継続しますが、これに加え桜中学校では、通常の学級担任を中心にして漢字とアルファベットの習得度をチェックし、より多くの教員が発達性ディスレクシアを認識して個々の学習支援に生かすことを目指しています。

(2)つくば市全体の取組

昨年度から延期されていた専門的教員の養成研修は、5月から来年1月にかけて実施予定であり、早期発見早期対応については、5～6月の研修を基に7月から簡便な STRAW-R 検査が実施できるよう進める予定です。



【桜学園の研修会の様子】

おわりに

つくば市教育局に特別支援教育推進室を設置して5年目を迎えています。特別支援教育を推進するためには、子どもたちに直接関わる担任教師（通常の学級及び特別支援学級）の指導力を高めることと併せて、管理職の理解と学校全体で取り組む体制づくりが必須であると考え、研修内容についても検討と改善を重ねてきました。

そうした中で、宇野元教授の研究に関わらせていただいたことはつくば市の大きな財産となっています。「発達障害」という言葉が一般的に知られるようになり、ADHDやASDはその行動特性から理解や配慮が進んできましたが、一方で、最も出現頻度の高いLD（その中でも多くを占める発達性ディスレクシア）は通常の学級で理解されにくく困難さを抱えているということに気づき、その対応を進めることができたからです。

発達性ディスレクシアの研究と実践を通して、管理職や通常の学級担任とともに児童生徒一人一人の困り感に目を向け、適切な指導や支援で子どもたちが変わり成長することを共有できることは、今後つくば市の特別支援教育の理解と推進が一気に進むことに繋がっていくと考えています。